

東南アジア史学会会報

1993年11月

第59号

目 次

1993年度春季会員総会摘録	(1)
第14期第3回委員会摘録	(1)
1992年度東南アジア史学会会計決算報告	(2)

第49回研究大会報告

プログラム	(4)
個人研究発表要旨	
14世紀のジャワ宮廷叙事詩『ナーガラクルターガマ』	
一その王権思想と民衆の世界観一	豊田 和規(4)
フランス領期のベトナムにおける伝統に関する認識	
一フイン・トゥク・カンとファム・クインの比較を中心について	岡田 建志(5)
北タイ、タイ・ルー族の守護靈儀礼とその社会的背景	
一ナーンへの移住史とのかかわりで一	馬場 雄司(6)
即位式と沐浴と龍—東南アジアの伝統文化と外来文化—	
山本 達郎(6)	
シンポジウム「東南アジアにおける脱植民地化と開発体制の展開」報告要旨	
ジャカルタの労働市場と不安定就業	宮本 謙介(7)
フィリピンのスラムと開発	中西 徹(8)
マレー系中間層を通じて見た新経済政策	奥村 みさ(8)
ビルマ式社会主義下の農村経済	高橋 昭雄(9)
ドイモイ（刷新）下の指導政党と社会	栗原 浩英(10)

資料・研究短報

フォー・ヒエン国際シンポジウムについて	奈良 修一(10)
第34回国際アジア・北アフリカ研究会議	市川健二郎(12)
第5回国際タイ研究会議参加報告	加藤久美子(14)

地区例会・研究会活動状況	(15)
新入会員・住所変更等	(17)

東南アジア史学会会報

1993年11月

第59号

目 次

1993年度春季会員総会摘録	(1)
第14期第3回委員会摘録	(1)
1992年度東南アジア史学会会計決算報告	(2)

第49回研究大会報告

プログラム	(4)
個人研究発表要旨	
14世紀のジャワ宮廷叙事詩『ナーガラクルターガマ』	
一その王権思想と民衆の世界観一	豊田 和規(4)
フランス領期のベトナムにおける伝統に関する認識	
一フイン・トゥク・カンとファム・クインの比較を中心について	岡田 建志(5)
北タイ、タイ・ルー族の守護靈儀礼とその社会的背景	
一ナーンへの移住史とのかかわりで一	馬場 雄司(6)
即位式と沐浴と龍—東南アジアの伝統文化と外来文化—	
山本 達郎(6)	
シンポジウム「東南アジアにおける脱植民地化と開発体制の展開」報告要旨	
ジャカルタの労働市場と不安定就業	宮本 謙介(7)
フィリピンのスラムと開発	中西 徹(8)
マレー系中間層を通じて見た新経済政策	奥村 みさ(8)
ビルマ式社会主義下の農村経済	高橋 昭雄(9)
ドイモイ（刷新）下の指導政党と社会	栗原 浩英(10)

資料・研究短報

フォー・ヒエン国際シンポジウムについて	奈良 修一(10)
第34回国際アジア・北アフリカ研究会議	市川健二郎(12)
第5回国際タイ研究会議参加報告	加藤久美子(14)

地区例会・研究会活動状況	(15)
新入会員・住所変更等	(17)

1993年度春季会員総会摘録

1993年度春季会員総会は、6月6日に桃木至朗会員を議長として、北海道大学学術交流会館で開催された。議事に先立ち、本年逝去された会員（故小林和正氏）のご冥福を祈り、出席者全員で黙祷を捧げた。

《報告事項》

1. 寺田庶務委員より、現在会員数は名簿上では385名であるとの報告がなされた。ただし、現状においては長期の会費未納会員などの調査・処置のため会員数は確定できず、今秋の新会長選挙人投票までに会員数を確定したいとの報告がなされた。このほか、名簿改訂版の完成、黒田景子関西地区委員の鹿児島大学赴任に伴い八尾隆生会員に関西地区委員の職務を委託したこと、研究助成基金の呼びかけ、日本学術会議への登録等についても報告があった。
2. 奥平会計委員より、1992年度一般会計収支報告および研究助成基金に関する報告がなされた。研究助成基金運用については、1992年度は中澤政樹、松澤賢彦、青山亨の各会員に運用されたとの報告がなされた。
3. 根本編集委員より『東南アジア一歴史と文化』第22号が出版されたことが報告された。学会誌のコストが上昇していることから、投稿規定の厳守の呼びかけ、および文献目録の採録基準を厳しくするとの報告がなされた。また、次号より会誌条文にレフェリー制度の存在を明記することも報告された。
4. 古田大会委員より、次回1993年度秋季大会は静岡県立大学で12月4日・5日に開催される予定であるとの報告があった。また、次回が50回大会であることを記念して、大会に先立ち山本達郎会員による記念講演会が12月3日に行われる予定であるとの報告もなされた。
5. 学術情報委員（土屋学術情報委員が欠席のため、石澤会長が代読）より、本年度の主要な研究会議とその開催地に関する報告があった。
6. 坪井東北・北海道地区委員、嶋尾関東地区委員、伊東中部地区委員、八尾関西地区委員、植村中国・四国地区委員より、各地区における研究会活動等についての報告があった。

《審議事項》

1. 前年度会計報告が奥平会計委員によりなされ、全会一致で承認された。
2. 上の前年度会計監査報告が吉川委員によりなされ、全会一致で承認された。
3. 古田大会委員より、次回（1993年度秋季）大会のシンポジウムのテーマは「東南アジアにおける先住民と移住民・人の移動と定着」とすることが提起され、全会一致で承認された。

第14期第3回委員会摘録

1993年6月6日、北海道大学で石澤会長が議長となり、総会案件、次回大会、及び研

1993年度春季会員総会摘録

1993年度春季会員総会は、6月6日に桃木至朗会員を議長として、北海道大学学術交流会館で開催された。議事に先立ち、本年逝去された会員（故小林和正氏）のご冥福を祈り、出席者全員で黙祷を捧げた。

《報告事項》

1. 寺田庶務委員より、現在会員数は名簿上では385名であるとの報告がなされた。ただし、現状においては長期の会費未納会員などの調査・処置のため会員数は確定できず、今秋の新会長選挙人投票までに会員数を確定したいとの報告がなされた。このほか、名簿改訂版の完成、黒田景子関西地区委員の鹿児島大学赴任に伴い八尾隆生会員に関西地区委員の職務を委託したこと、研究助成基金の呼びかけ、日本学術会議への登録等についても報告があった。
2. 奥平会計委員より、1992年度一般会計収支報告および研究助成基金に関する報告がなされた。研究助成基金運用については、1992年度は中澤政樹、松澤賢彦、青山亨の各会員に運用されたとの報告がなされた。
3. 根本編集委員より『東南アジア一歴史と文化』第22号が出版されたことが報告された。学会誌のコストが上昇していることから、投稿規定の厳守の呼びかけ、および文献目録の採録基準を厳しくするとの報告がなされた。また、次号より会誌条文にレフェリー制度の存在を明記することも報告された。
4. 古田大会委員より、次回1993年度秋季大会は静岡県立大学で12月4日・5日に開催される予定であるとの報告があった。また、次回が50回大会であることを記念して、大会に先立ち山本達郎会員による記念講演会が12月3日に行われる予定であるとの報告もなされた。
5. 学術情報委員（土屋学術情報委員が欠席のため、石澤会長が代読）より、本年度の主要な研究会議とその開催地に関する報告があった。
6. 坪井東北・北海道地区委員、嶋尾関東地区委員、伊東中部地区委員、八尾関西地区委員、植村中国・四国地区委員より、各地区における研究会活動等についての報告があった。

《審議事項》

1. 前年度会計報告が奥平会計委員によりなされ、全会一致で承認された。
2. 上の前年度会計監査報告が吉川委員によりなされ、全会一致で承認された。
3. 古田大会委員より、次回（1993年度秋季）大会のシンポジウムのテーマは「東南アジアにおける先住民と移住民・人の移動と定着」とすることが提起され、全会一致で承認された。

第14期第3回委員会摘録

1993年6月6日、北海道大学で石澤会長が議長となり、総会案件、次回大会、及び研

究助成基金に関する問題について審議した。

1. 静岡県立大学で開催される予定の次回秋季大会については、シンポジウムの共通論題として静岡県立大学鈴木静夫会員より、本年度が国際先住民年であることと関連して、「東南アジア史における先住民」としてはどうかとの提案があったことが報告され、審議された。

これについて、「先住民」の概念をどのようにとるか、などの問題について多方面からの検討がなされ、審議の結果シンポジウムのテーマを「東南アジアにおける先住民と移住民：人の移動と定着」とすることで了承した。

2. 研究助成基金について、規定の改定を行い、一般会計から分離した方が処理しやすいのではないか、との意見が出され、今後検討していくべき問題であることが確認された。

1992年度会計決算報告

(1992年1月1日～12月31日)

1993年1月15日

第14期会計担当委員 奥平龍二・今村宣勝

I. 収入の部		II. 支出の部	
1. 会員会費	2,400,500	1. 会誌関係	
2. 預貯金利子	8,269	(1) 誌代 (385冊)	1,201,200
3. 会誌学会在庫売上	29,360	(2) 編集費	141,095
4. 業績目録売上	6,400	(3) 事務費	17,347
5. 業績目録補遺売上	11,200		
6. 会員名簿売上	0	小計	1,359,642①
7. 前年度繰越金	1,247,298	2. 会報作成費	420,817②
合計	3,703,027	3. 大会関係	
III. 残額 (次年度繰越金)		(1) 大会予報費	36,264
収入合計	3,703,027	(2) プログラム・	
支出合計	2,952,058	ポスター等作成費	73,395
残額	750,969	(3) 運営費	568,754
* 残額内訳		小計	678,413③
郵便局 (普通)	142,993	4. 会報・大会プログラム等郵送費	
郵便局 (振替)	423,608		228,865④
銀行 (第一勧銀)	52,121	5. 名簿作成準備費	18,147⑤
現金 (庶務)	32,247	6. 委員会・事務局経費	246,174⑥
現金 (編集)	100,000	以上 (①～⑥) 合計	2,952,058
	750,969		

研究助成基金に関する1992年度会計報告（1月1日～12月31日）

1993年1月15日

第14期会計担当委員 奥平龍二・今村宣勝

I. 基金収入

日付	適用	収入	残高
01/01	前年度繰越金	2,930,010	2,930,010
01/22	一口	10,000	2,940,010
05/06	一口	10,000	2,950,010
11/12	一口	10,000	2,960,010
11/20	一口	10,000	2,970,010
11/24	一口	10,000	2,980,010
12/03	一口	10,000	2,990,010
12/29	一口	10,000	3,000,010
12/29	一口	10,000	3,010,010

基金収入合計 3,010,010

内訳	郵便局 1年定期	1,000,000
	郵便局 1年定期	1,600,000
	郵便局（普通）	390,010
	郵便局（振替）	20,000

II. 基金運用会計

1. 基金運用収入

日付	適用	収入
04/01	普通貯金に対する利子	1,637
06/12	1年定期(1,000,000)に対する利子	45,120
11/21	1年定期(1,600,000)に対する利子	64,144
合計		110,901……①

2. 基金運用支出

日付	適用	支出
06/13	中沢正樹	10,235
12/06	松澤賢彦	20,920
12/06	青山 亨	5,480
合計		36,635……②

3. 基金運用残高

①-②=¥74,266- (次年度基金運用会計への繰越金)

第49回研究大会報告

東南アジア史学会第49回研究大会（大会準備委員長・坪井善明氏）は1993年6月5日に北海道大学軍艦講堂、6日に同大学術交流会館において開催され、両日とも多数の参加者を得て盛会となった。プログラム、自由研究発表、シンポジウムの要旨は以下のとおりである（特別講演については長文のため割愛した）。

6月5日（土）

- 13：30 開会の辞 大会準備委員長（北海道大学）坪井善明
自由研究発表
- 13：40 14世紀のジャワ宮廷叙事詩『ナーガラクルターガマ』—その王権思想と民衆の世界観一 (東南アジア史学会) 豊田和規
- 14：20 フランス領期のベトナムにおける伝統に関する認識—フイン・トゥク・カンとファム・クインの比較を中心に一 (東京大学大学院) 岡田建志
- 15：15 北タイ、タイ・ルー族の守護霊とその社会的背景—ナーンへの移住史とのかかわりで一 (同朋大学) 馬場雄司
- 15：55 即位式と沐浴と龍—東南アジアの伝統文化と外来文化一 (東京大学名誉教授) 山本達郎
特別講演

- 16：35 Looking Back on 'The Sulu Zone': State Formation and Ethnic Diversity in Southeast Asia James Warren
(マードック大学教授・京都大学東南アジア研究センター客員研究員)

6月6日（日）

- シンポジウム〈東南アジアにおける脱植民地化と開発体制の展開〉
- 9：20 趣旨説明 (天理大学) 弘末雅士
- 9：30 ジャカルタの労働市場と不安定就業 (北海道大学) 宮本謙介
- 10：10 フィリピンのスラムと開発 (東京大学) 中西 徹
- 10：50 マレー系中間層を通じて見た新経済政策 (学術振興会特別研究員) 奥村みさ
- 11：30 ビルマ式社会主義下の農村経済 (アジア経済研究所) 高橋昭雄
- 13：10 会員総会
- 13：50 ドイモイ（刷新）下の指導政党と社会 (東京外国语大学) 栗原浩英
- 14：30 総合討論 司会（東京大学）加納啓良 (京都大学) 前田成文
会長 石澤良昭
- 16：00 閉会の辞

14世紀のジャワ宮廷叙事詩『ナーガラクルターガマ』—その王権思想と民衆の世界観一 豊田和規

『ナーガラクルターガマ』は、1365年、ジャワのマジャパヒト王国の宮廷詩人であ

第49回研究大会報告

東南アジア史学会第49回研究大会（大会準備委員長・坪井善明氏）は1993年6月5日に北海道大学軍艦講堂、6日に同大学術交流会館において開催され、両日とも多数の参加者を得て盛会となった。プログラム、自由研究発表、シンポジウムの要旨は以下のとおりである（特別講演については長文のため割愛した）。

6月5日（土）

- 13：30 開会の辞 大会準備委員長（北海道大学）坪井善明
自由研究発表
- 13：40 14世紀のジャワ宮廷叙事詩『ナーガラクルターガマ』—その王権思想と民衆の世界観一 (東南アジア史学会) 豊田和規
- 14：20 フランス領期のベトナムにおける伝統に関する認識—フイン・トゥク・カンとファム・クインの比較を中心に一 (東京大学大学院) 岡田建志
- 15：15 北タイ、タイ・ルー族の守護霊とその社会的背景—ナーンへの移住史とのかかわりで一 (同朋大学) 馬場雄司
- 15：55 即位式と沐浴と龍—東南アジアの伝統文化と外来文化一 (東京大学名誉教授) 山本達郎
特別講演

- 16：35 Looking Back on 'The Sulu Zone': State Formation and Ethnic Diversity in Southeast Asia James Warren
(マードック大学教授・京都大学東南アジア研究センター客員研究員)

6月6日（日）

- シンポジウム〈東南アジアにおける脱植民地化と開発体制の展開〉
- 9：20 趣旨説明 (天理大学) 弘末雅士
- 9：30 ジャカルタの労働市場と不安定就業 (北海道大学) 宮本謙介
- 10：10 フィリピンのスラムと開発 (東京大学) 中西 徹
- 10：50 マレー系中間層を通じて見た新経済政策 (学術振興会特別研究員) 奥村みさ
- 11：30 ビルマ式社会主義下の農村経済 (アジア経済研究所) 高橋昭雄
- 13：10 会員総会
- 13：50 ドイモイ（刷新）下の指導政党と社会 (東京外国语大学) 栗原浩英
- 14：30 総合討論 司会（東京大学）加納啓良 (京都大学) 前田成文
会長 石澤良昭
- 16：00 閉会の辞

14世紀のジャワ宮廷叙事詩『ナーガラクルターガマ』—その王権思想と民衆の世界観一 豊田和規

『ナーガラクルターガマ』は、1365年、ジャワのマジャパヒト王国の宮廷詩人であ

第49回研究大会報告

東南アジア史学会第49回研究大会（大会準備委員長・坪井善明氏）は1993年6月5日に北海道大学軍艦講堂、6日に同大学術交流会館において開催され、両日とも多数の参加者を得て盛会となった。プログラム、自由研究発表、シンポジウムの要旨は以下のとおりである（特別講演については長文のため割愛した）。

6月5日（土）

- 13：30 開会の辞 大会準備委員長（北海道大学）坪井善明
自由研究発表
- 13：40 14世紀のジャワ宮廷叙事詩『ナーガラクルターガマ』—その王権思想と民衆の世界観一 (東南アジア史学会) 豊田和規
- 14：20 フランス領期のベトナムにおける伝統に関する認識—フイン・トゥク・カンとファム・クインの比較を中心に一 (東京大学大学院) 岡田建志
- 15：15 北タイ、タイ・ルー族の守護霊とその社会的背景—ナーンへの移住史とのかかわりで一 (同朋大学) 馬場雄司
- 15：55 即位式と沐浴と龍—東南アジアの伝統文化と外来文化一 (東京大学名誉教授) 山本達郎
特別講演

- 16：35 Looking Back on 'The Sulu Zone': State Formation and Ethnic Diversity in Southeast Asia James Warren
(マードック大学教授・京都大学東南アジア研究センター客員研究員)

6月6日（日）

- シンポジウム〈東南アジアにおける脱植民地化と開発体制の展開〉
- 9：20 趣旨説明 (天理大学) 弘末雅士
- 9：30 ジャカルタの労働市場と不安定就業 (北海道大学) 宮本謙介
- 10：10 フィリピンのスラムと開発 (東京大学) 中西 徹
- 10：50 マレー系中間層を通じて見た新経済政策 (学術振興会特別研究員) 奥村みさ
- 11：30 ビルマ式社会主義下の農村経済 (アジア経済研究所) 高橋昭雄
- 13：10 会員総会
- 13：50 ドイモイ（刷新）下の指導政党と社会 (東京外国语大学) 栗原浩英
- 14：30 総合討論 司会（東京大学）加納啓良 (京都大学) 前田成文
会長 石澤良昭
- 16：00 閉会の辞

14世紀のジャワ宮廷叙事詩『ナーガラクルターガマ』—その王権思想と民衆の世界観一 豊田和規

『ナーガラクルターガマ』は、1365年、ジャワのマジャパヒト王国の宮廷詩人であ

るプラパンチャによって書かれた韻文形式の叙事詩である。当時、マジャパヒト王国は最盛期をむかえ、この書は、国王ラジャサナガラ（ハヤム・ウルク）を賞め讃えている。1894年、ロンボク島で、ブランデス博士 Dr. J. L. A. Brandes によって、写本が初めて発見されて以来、その後いくつかの写本が発見されている。それらは、ロンタル（貝葉）にバリ文字によって、古代ジャワ語で記されている。

発表者は、『ナーガラクルターガマ』の和訳にあたっては、基本的にインドネシア人学者スラムットムルヨノ教授 Prof. Dr. Slametmulyana の『ナーガラクルターガマとその歴史解釈』Nagarakretagama dan Tafsir Sejarahnya, Jakarta, 1979.を拝読し用い、次にピジョー博士 Dr. Th. Pigeaud の大著『14世紀のジャワ』Java in the Fourteenth Century: A Study in Cultural History, 5 vols., The Hague, 1960-1963.をも参照とした。

当時のジャワでは、土地は富の源泉とはならず、富の源泉は、人間、すなわち労働力であった。支配者は王制イデオロギーを創り出すことによって、人間を精神的に従属させざるをえなかった。王制イデオロギーは、王権思想に基づくものであり、また同時に民衆の世界観に適合したものでなければならなかつた。

本発表の課題は、『ナーガラクルターガマ』を手掛りとして、国王がみずから権力を正当化するための王権思想を解明し、民衆の世界観を考察することにある。発表者は、民衆の世界観とは、外部世界と内部世界からなるアニミズム的な二元的世界観であり、その媒介として国王が位置づいていたと考える。

フランス領期のベトナムにおける伝統に関する認識

——フイン・トゥク・カンとファム・クインの比較を中心に

——岡田建志

フランス植民地支配下のベトナムにおいては、ベトナムという枠組をどのような内実を持つものとしてとらえるべきかということが問題となっていた。本論の目的は、フイン・トゥク・カンとファム・クインという二人の知識人を取り上げ、1930年前後の時期に両者がどのような枠組で何をベトナムの伝統ととらえていたのかという点について比較を行うことである。

フイン・トゥク・カンの主張では、ベトナム史上独自の思想的発展の萌芽があったとされ、それが充分に発展しなかったのは15世紀以降朱子学が唯一の正統とされたことによるとされる。カンの主張では、朱子学は本来の儒学ではなく専制支配の手段であって、継承すべき伝統とは考えられていなかった。ファム・クインは、儒学を東洋の伝統文化として把握し、フイン・トゥク・カンにおいては批判の対象となる三綱をその核と考える一方で、ベトナム独自の思想的発展は過去には存在しなかつたと考える。また、フイン・トゥク・カンは、漢文文学とは別にベトナム語による固有の文学の伝統が中国の影響を受ける以前から存在すると主張した。一方、ファム・クインは、ベトナム語による文学は特色あるものとしての発展を充分に遂げてこなかつたとしている。また、ファム・クインは、使用する言語が外国語であるかぎり、そこの表現さ

るプラパンチャによって書かれた韻文形式の叙事詩である。当時、マジャパヒト王国は最盛期をむかえ、この書は、国王ラジャサナガラ（ハヤム・ウルク）を賞め讃えている。1894年、ロンボク島で、ブランデス博士 Dr. J. L. A. Brandes によって、写本が初めて発見されて以来、その後いくつかの写本が発見されている。それらは、ロンタル（貝葉）にバリ文字によって、古代ジャワ語で記されている。

発表者は、『ナーガラクルターガマ』の和訳にあたっては、基本的にインドネシア人学者スラムットムルヨノ教授 Prof. Dr. Slametmulyana の『ナーガラクルターガマとその歴史解釈』Nagarakretagama dan Tafsir Sejarahnya, Jakarta, 1979.を拝読し用い、次にピジョー博士 Dr. Th. Pigeaud の大著『14世紀のジャワ』Java in the Fourteenth Century: A Study in Cultural History, 5 vols., The Hague, 1960-1963.をも参照とした。

当時のジャワでは、土地は富の源泉とはならず、富の源泉は、人間、すなわち労働力であった。支配者は王制イデオロギーを創り出すことによって、人間を精神的に従属させざるをえなかった。王制イデオロギーは、王権思想に基づくものであり、また同時に民衆の世界観に適合したものでなければならなかつた。

本発表の課題は、『ナーガラクルターガマ』を手掛りとして、国王がみずから権力を正当化するための王権思想を解明し、民衆の世界観を考察することにある。発表者は、民衆の世界観とは、外部世界と内部世界からなるアニミズム的な二元的世界観であり、その媒介として国王が位置づいていたと考える。

フランス領期のベトナムにおける伝統に関する認識

——フイン・トゥク・カンとファム・クインの比較を中心に

——岡田建志

フランス植民地支配下のベトナムにおいては、ベトナムという枠組をどのような内実を持つものとしてとらえるべきかということが問題となっていた。本論の目的は、フイン・トゥク・カンとファム・クインという二人の知識人を取り上げ、1930年前後の時期に両者がどのような枠組で何をベトナムの伝統ととらえていたのかという点について比較を行うことである。

フイン・トゥク・カンの主張では、ベトナム史上独自の思想的発展の萌芽があったとされ、それが充分に発展しなかったのは15世紀以降朱子学が唯一の正統とされたことによるとされる。カンの主張では、朱子学は本来の儒学ではなく専制支配の手段であって、継承すべき伝統とは考えられていなかった。ファム・クインは、儒学を東洋の伝統文化として把握し、フイン・トゥク・カンにおいては批判の対象となる三綱をその核と考える一方で、ベトナム独自の思想的発展は過去には存在しなかつたと考える。また、フイン・トゥク・カンは、漢文文学とは別にベトナム語による固有の文学の伝統が中国の影響を受ける以前から存在すると主張した。一方、ファム・クインは、ベトナム語による文学は特色あるものとしての発展を充分に遂げてこなかつたとしている。また、ファム・クインは、使用する言語が外国語であるかぎり、そこの表現さ

れた内容も模倣の域を出ないものだという観点から、漢文による著作に対する評価に留保をつけている。

フイン・トゥク・カンは、歴史を溯って中国に対するベトナムの固有性を想定したうえで、その固有性と中国からの影響とが重なり合うものとしてベトナムの伝統を把握し、その中から何を継承すべきかという議論をしている。これに対し、ファム・クインは、伝統的要素のなかに継承すべきものがあると考える一方で、ベトナムの伝統文化が中国の模倣を主とするものであったと把握し、確固たるベトナムの独自性は過去には存在しなかったととらえている。

北タイ、タイ・ルー族の守護霊儀礼とその社会的背景

——ナーンへの移住史とのかかわりで—— 馬場雄司

タイ北部に居住するタイ・ルー族は、雲南に形成されたシプソーンパンナー王国を出自とする。ナーン県ターワンパー郡の N, D, T 村は、19世紀、内乱によってシプソーンパンナーのムアンラーから移住し、ナーン土候のもとに入植したことを起源とする。三村は、三年に一度、ムアンラーからの移住を記念し、守護霊チャオルアンムアンラーを合祀する。儀礼は三日間にわたって N 村で行われ、D 村に住むムアンラーの土候の子孫チャオムアンと N 村に住む司祭（モームアン）が中心となり、水牛等が供儀される。今日、この儀礼は N 村主導のもと外部を意識して肥大化し、観光局も注目している。現在、儀礼を主催とする N 村は農村開発の模範村である。一方 D 村は貧しく、かつてのチャオムアンが村人を殺害した業が貧困をもたらしたといわれる。ここに、D 村と、N 村の間の儀礼をめぐる「心理的」葛藤がある。二村の間には、日常の社会関係におけるコンフリクトはほとんどない。ところが、D 村の貧困の説明となるチャオムアンは、儀礼における最も重要な役職であり、D 村は儀礼に参加せざるを得ない。従って、N 村中心の儀礼の肥大化に拍車がかかることで、「心理的」葛藤が強まるのである。タイ・ルーのターワンパー盆地入植に関する歴史に関しても、D 村では入植時よりチャオムアンは D 村にいたとするが、N 村では N 村から他の二村が分村したとする。地理環境や伝承を考慮すると、D 村の入植が先と考えられるが、この N 村中心の歴史解釈は、N 村を中心としたタイ・ルーの「伝統」の創造と関わっている。この儀礼は故地ムアンラーではムアンラー土候の権威維持を目的としたが、タイ国移住後の今日、ムアンラー土候の子孫は儀礼上の役割のみ果たし政治的権威はない。タイという「国民国家」における農村開発競争という文脈で、ある村が他村に対する優位を確認させるという新たな権威が、この儀礼に関わっているようである。

即位式と沐浴と龍

——東南アジアの伝統文化と外来文化—— 山本達郡

東南アジアはインド・中国・イスラム・西洋の各種の文化を受容しながら、古くか

れた内容も模倣の域を出ないものだという観点から、漢文による著作に対する評価に留保をつけている。

フイン・トゥク・カンは、歴史を溯って中国に対するベトナムの固有性を想定したうえで、その固有性と中国からの影響とが重なり合うものとしてベトナムの伝統を把握し、その中から何を継承すべきかという議論をしている。これに対し、ファム・クインは、伝統的要素のなかに継承すべきものがあると考える一方で、ベトナムの伝統文化が中国の模倣を主とするものであったと把握し、確固たるベトナムの独自性は過去には存在しなかったととらえている。

北タイ、タイ・ルー族の守護霊儀礼とその社会的背景

——ナーンへの移住史とのかかわりで—— 馬場雄司

タイ北部に居住するタイ・ルー族は、雲南に形成されたシプソーンパンナー王国を出自とする。ナーン県ターワンパー郡の N, D, T 村は、19世紀、内乱によってシプソーンパンナーのムアンラーから移住し、ナーン土候のもとに入植したことを起源とする。三村は、三年に一度、ムアンラーからの移住を記念し、守護霊チャオルアンムアンラーを合祀する。儀礼は三日間にわたって N 村で行われ、D 村に住むムアンラーの土候の子孫チャオムアンと N 村に住む司祭（モームアン）が中心となり、水牛等が供儀される。今日、この儀礼は N 村主導のもと外部を意識して肥大化し、観光局も注目している。現在、儀礼を主催とする N 村は農村開発の模範村である。一方 D 村は貧しく、かつてのチャオムアンが村人を殺害した業が貧困をもたらしたといわれる。ここに、D 村と、N 村の間の儀礼をめぐる「心理的」葛藤がある。二村の間には、日常の社会関係におけるコンフリクトはほとんどない。ところが、D 村の貧困の説明となるチャオムアンは、儀礼における最も重要な役職であり、D 村は儀礼に参加せざるを得ない。従って、N 村中心の儀礼の肥大化に拍車がかかることで、「心理的」葛藤が強まるのである。タイ・ルーのターワンパー盆地入植に関する歴史に関しても、D 村では入植時よりチャオムアンは D 村にいたとするが、N 村では N 村から他の二村が分村したとする。地理環境や伝承を考慮すると、D 村の入植が先と考えられるが、この N 村中心の歴史解釈は、N 村を中心としたタイ・ルーの「伝統」の創造と関わっている。この儀礼は故地ムアンラーではムアンラー土候の権威維持を目的としたが、タイ国移住後の今日、ムアンラー土候の子孫は儀礼上の役割のみ果たし政治的権威はない。タイという「国民国家」における農村開発競争という文脈で、ある村が他村に対する優位を確認させるという新たな権威が、この儀礼に関わっているようである。

即位式と沐浴と龍

——東南アジアの伝統文化と外来文化—— 山本達郡

東南アジアはインド・中国・イスラム・西洋の各種の文化を受容しながら、古くか

れた内容も模倣の域を出ないものだという観点から、漢文による著作に対する評価に留保をつけている。

フイン・トゥク・カンは、歴史を溯って中国に対するベトナムの固有性を想定したうえで、その固有性と中国からの影響とが重なり合うものとしてベトナムの伝統を把握し、その中から何を継承すべきかという議論をしている。これに対し、ファム・クインは、伝統的要素のなかに継承すべきものがあると考える一方で、ベトナムの伝統文化が中国の模倣を主とするものであったと把握し、確固たるベトナムの独自性は過去には存在しなかったととらえている。

北タイ、タイ・ルー族の守護霊儀礼とその社会的背景

——ナーンへの移住史とのかかわりで—— 馬場雄司

タイ北部に居住するタイ・ルー族は、雲南に形成されたシプソーンパンナー王国を出自とする。ナーン県ターワンパー郡の N, D, T 村は、19世紀、内乱によってシプソーンパンナーのムアンラーから移住し、ナーン土候のもとに入植したことを起源とする。三村は、三年に一度、ムアンラーからの移住を記念し、守護霊チャオルアンムアンラーを合祀する。儀礼は三日間にわたって N 村で行われ、D 村に住むムアンラーの土候の子孫チャオムアンと N 村に住む司祭（モームアン）が中心となり、水牛等が供儀される。今日、この儀礼は N 村主導のもと外部を意識して肥大化し、観光局も注目している。現在、儀礼を主催とする N 村は農村開発の模範村である。一方 D 村は貧しく、かつてのチャオムアンが村人を殺害した業が貧困をもたらしたといわれる。ここに、D 村と、N 村の間の儀礼をめぐる「心理的」葛藤がある。二村の間には、日常の社会関係におけるコンフリクトはほとんどない。ところが、D 村の貧困の説明となるチャオムアンは、儀礼における最も重要な役職であり、D 村は儀礼に参加せざるを得ない。従って、N 村中心の儀礼の肥大化に拍車がかかることで、「心理的」葛藤が強まるのである。タイ・ルーのターワンパー盆地入植に関する歴史に関しても、D 村では入植時よりチャオムアンは D 村にいたとするが、N 村では N 村から他の二村が分村したとする。地理環境や伝承を考慮すると、D 村の入植が先と考えられるが、この N 村中心の歴史解釈は、N 村を中心としたタイ・ルーの「伝統」の創造と関わっている。この儀礼は故地ムアンラーではムアンラー土候の権威維持を目的としたが、タイ国移住後の今日、ムアンラー土候の子孫は儀礼上の役割のみ果たし政治的権威はない。タイという「国民国家」における農村開発競争という文脈で、ある村が他村に対する優位を確認させるという新たな権威が、この儀礼に関わっているようである。

即位式と沐浴と龍

——東南アジアの伝統文化と外来文化—— 山本達郡

東南アジアはインド・中国・イスラム・西洋の各種の文化を受容しながら、古くか

らの基層文化を生き生きと保ち続けている。広くモンスーンアジアの農業、特に稻作、の地帯には、超自然的な力があって水や雨と密接な関係を持つ龍や蛇が、現在も広く尊重され信仰されているが、これらは古い基層文化に由来するものと認められることが出来るのではなかろうか。

扶南・カンボジア・ベトナム・チャンパ・タイ・ラオス・ビルマ・南詔の建国説話を比較すると、それぞれ話の筋が全く異っていて、直接の伝承関係を認め難いに拘らず、国王の祖先として、或は原初的な支配者として、龍又は *nāga* が共通に現れており、それが外来のインド・中国・イスラムの文化に対して、土着の力を表す形となっている（東南アジア史学会第34回研究大会、1985年12月8日、発表）。東南アジアから華中・華南・日本にわたって広く分布する龍に関する強い祭りとしてボートレースと綱引きが注目されるが、これらの舟や綱は龍と認められることが多く、その祭りは雨や水の増減と関係が深い。

ここでは建国説話を切り離せない王の即位式を取り上げる。上座部仏教圏のタイ・ビルマ・カンボジアのそれをみると、何れの場合もバラモンの役割りが大きく、インド教の神々の現れる場合もあるが、どの事例でも沐浴が重要な意味を持っている。イスラム圏のマレーシアでは様相が違うが、やはり水を浴びるのが重要である。これら東南アジアの即位式にはインドの即位灌頂の影響が大きいが、注目されるのはその相違点で、東南アジアで重要なのは全身の水浴である。ムオン・シン（ラオス最北部）やウボンの首長の即位式は専ら水浴だけで、後者では龍の形をした容器から水を注ぐことになっている。ラオスの僧侶の叙任の儀式でも同様な実器が使われる。これらは龍から力が来るという考え方を示すものとして、建国説話とも結びつけることが出来るであろう。（スライド使用）

シンポジウム報告要旨

ジャカルタの労働市場と不安定就業——宮本謙介

本報告は、1991年のジャカルタ滞在中に行った、都市労働市場に関する資料収集および予備市場調査（本調査は2年後の予定）の結果の一部に基づくものである。

報告では、はじめにジャカルタの労働問題研究を概観し、I. 労働力構成の特徴を述べる。次に、II. 上級労働市場、III. 中小零細企業の労働市場、IV. 雑業的労働市場の順に、重層化した労働市場における「不安定就業」の構造把握を試みる。

I の労働力構成では、労働力の産業別構成や学歴別構成を指摘するとともに、季節住民（出稼ぎ労働者）や若年労働力にも注目して、中央統計局センサスには計上されない労働力の実態にも言及する。

II の上級労働市場では、外資系（日系）企業で行ったインタビュー調査の結果に拠って、学歴で分断された内部労働市場の特質、近年の労働争議から推察される工場労働者の不安定就業について述べる。

III の中小零細企業の労働市場では、UI の調査事例および筆者のインタビュー調査か

らの基層文化を生き生きと保ち続けている。広くモンスーンアジアの農業、特に稻作、の地帯には、超自然的な力があって水や雨と密接な関係を持つ龍や蛇が、現在も広く尊重され信仰されているが、これらは古い基層文化に由来するものと認められることが出来るのではなかろうか。

扶南・カンボジア・ベトナム・チャンパ・タイ・ラオス・ビルマ・南詔の建国説話を比較すると、それぞれ話の筋が全く異っていて、直接の伝承関係を認め難いに拘らず、国王の祖先として、或は原初的な支配者として、龍又は *nāga* が共通に現れており、それが外来のインド・中国・イスラムの文化に対して、土着の力を表す形となっている（東南アジア史学会第34回研究大会、1985年12月8日、発表）。東南アジアから華中・華南・日本にわたって広く分布する龍に関する強い祭りとしてボートレースと綱引きが注目されるが、これらの舟や綱は龍と認められることが多く、その祭りは雨や水の増減と関係が深い。

ここでは建国説話を切り離せない王の即位式を取り上げる。上座部仏教圏のタイ・ビルマ・カンボジアのそれをみると、何れの場合もバラモンの役割りが大きく、インド教の神々の現れる場合もあるが、どの事例でも沐浴が重要な意味を持っている。イスラム圏のマレーシアでは様相が違うが、やはり水を浴びるのが重要である。これら東南アジアの即位式にはインドの即位灌頂の影響が大きいが、注目されるのはその相違点で、東南アジアで重要なのは全身の水浴である。ムオン・シン（ラオス最北部）やウボンの首長の即位式は専ら水浴だけで、後者では龍の形をした容器から水を注ぐことになっている。ラオスの僧侶の叙任の儀式でも同様な実器が使われる。これらは龍から力が来るという考え方を示すものとして、建国説話とも結びつけることが出来るであろう。（スライド使用）

シンポジウム報告要旨

ジャカルタの労働市場と不安定就業——宮本謙介

本報告は、1991年のジャカルタ滞在中に行った、都市労働市場に関する資料収集および予備市場調査（本調査は2年後の予定）の結果の一部に基づくものである。

報告では、はじめにジャカルタの労働問題研究を概観し、I. 労働力構成の特徴を述べる。次に、II. 上級労働市場、III. 中小零細企業の労働市場、IV. 雑業的労働市場の順に、重層化した労働市場における「不安定就業」の構造把握を試みる。

I の労働力構成では、労働力の産業別構成や学歴別構成を指摘するとともに、季節住民（出稼ぎ労働者）や若年労働力にも注目して、中央統計局センサスには計上されない労働力の実態にも言及する。

II の上級労働市場では、外資系（日系）企業で行ったインタビュー調査の結果に拠って、学歴で分断された内部労働市場の特質、近年の労働争議から推察される工場労働者の不安定就業について述べる。

III の中小零細企業の労働市場では、UI の調査事例および筆者のインタビュー調査か

ら、中小零細企業の労働者に共通して見られる就労の特異性と不安定性について指摘する。

IVの雑業的労働市場に関しては、筆者が行ったインタビュー調査のうち、露店・行商とバイク・タクシーの事例を紹介し、出稼ぎ労働者を主体とする雑業的労働の実態把握を試みる。

以上によって、開発工業化の下で、急速に肥大化する首都圏・都市労働市場の編成と、上級労働市場から雑業的労働市場まで広範囲に見られる不安的就業の存在に注目し、労働問題の視角から開発体制の評価を考える。

フィリピンのスラムと開発——中西 徹

この報告では、フィリピンの慢性的な経済停滞状態が主として1970年代の「開発政策」に起因することをあきらかにし、停滞から脱出するための糸口を検討したい。

工業化を重視した経済開発論、とくにその巨視的分析では、経済発展過程における農業の役割は、①生産、②生産要素、③市場、④外貨の側面における工業部門に対する貢献にあると規定される。フィリピンの経済停滞はこの開発論を意図的な曲解の下に「開発」政策へ適用したために生じたと解釈することができる。農村を製品市場と考えず工業化を推進した政策当局にとって、賃金財たる農産物の生産性向上は、1)賃金費用節約、2)労働組合対策、3)食糧輸入抑制による外貨節約の観点からのみ重要な課題であった。「緑の革命」と農地改革による1970年代の農業開発はこの要請の下に行われ、農村側の諸条件は無視されたのである。そのため、農民階層分化によって村落社会経済メカニズムが変容するに及び、土地なし層を中心とする過剰な農村都市間人口移動が生じた。かくて、マニラ首都圏に大規模なスラムが形成されたのである。しかも、スラムには独自の拡大メカニズムが内在し、都市インフォーマル部門が雇用を吸収してきたために、資本集約財産業主導の工業部門における雇用吸収力の低さにもかかわらず、その規模は拡大の一途を辿った。現在のマニラ首都圏における大規模なスラムの存在は、70年代の「開発政策」の必然的帰結であり、その失敗の象徴であるといえよう。

したがって、従来の工業化要件としての「農村開発」（農業技術革新や対象を小作農に限定した農地改革の推進）はフィリピンの経済発展のための十分条件ではない。大都市スラム居住者の経済支持政策と、農村最貧層（中小地主制度下の土地なし層、大農園制度における農園労働者や最貧農村地方の居住者）の経済支持政策をリンクさせた総合的な「開発」計画の立案と実施が喫緊の課題である。

マレー系ミドルクラスを通して見た新経済政策——奥村みさ

マレーシア政府が1970年から1991年まで実施してきた、新経済政策（New Economic Policy、以下 NEP と略す）は、マレーシアの「独立国家としての真の自立・

ら、中小零細企業の労働者に共通して見られる就労の特異性と不安定性について指摘する。

IVの雑業的労働市場に関しては、筆者が行ったインタビュー調査のうち、露店・行商とバイク・タクシーの事例を紹介し、出稼ぎ労働者を主体とする雑業的労働の実態把握を試みる。

以上によって、開発工業化の下で、急速に肥大化する首都圏・都市労働市場の編成と、上級労働市場から雑業的労働市場まで広範囲に見られる不安的就業の存在に注目し、労働問題の視角から開発体制の評価を考える。

フィリピンのスラムと開発——中西 徹

この報告では、フィリピンの慢性的な経済停滞状態が主として1970年代の「開発政策」に起因することをあきらかにし、停滞から脱出するための糸口を検討したい。

工業化を重視した経済開発論、とくにその巨視的分析では、経済発展過程における農業の役割は、①生産、②生産要素、③市場、④外貨の側面における工業部門に対する貢献にあると規定される。フィリピンの経済停滞はこの開発論を意図的な曲解の下に「開発」政策へ適用したために生じたと解釈することができる。農村を製品市場と考えず工業化を推進した政策当局にとって、賃金財たる農産物の生産性向上は、1)賃金費用節約、2)労働組合対策、3)食糧輸入抑制による外貨節約の観点からのみ重要な課題であった。「緑の革命」と農地改革による1970年代の農業開発はこの要請の下に行われ、農村側の諸条件は無視されたのである。そのため、農民階層分化によって村落社会経済メカニズムが変容するに及び、土地なし層を中心とする過剰な農村都市間人口移動が生じた。かくて、マニラ首都圏に大規模なスラムが形成されたのである。しかも、スラムには独自の拡大メカニズムが内在し、都市インフォーマル部門が雇用を吸収してきたために、資本集約財産業主導の工業部門における雇用吸収力の低さにもかかわらず、その規模は拡大の一途を辿った。現在のマニラ首都圏における大規模なスラムの存在は、70年代の「開発政策」の必然的帰結であり、その失敗の象徴であるといえよう。

したがって、従来の工業化要件としての「農村開発」（農業技術革新や対象を小作農に限定した農地改革の推進）はフィリピンの経済発展のための十分条件ではない。大都市スラム居住者の経済支持政策と、農村最貧層（中小地主制度下の土地なし層、大農園制度における農園労働者や最貧農村地方の居住者）の経済支持政策をリンクさせた総合的な「開発」計画の立案と実施が喫緊の課題である。

マレー系ミドルクラスを通して見た新経済政策——奥村みさ

マレーシア政府が1970年から1991年まで実施してきた、新経済政策（New Economic Policy、以下 NEP と略す）は、マレーシアの「独立国家としての真の自立・

ら、中小零細企業の労働者に共通して見られる就労の特異性と不安定性について指摘する。

IVの雑業的労働市場に関しては、筆者が行ったインタビュー調査のうち、露店・行商とバイク・タクシーの事例を紹介し、出稼ぎ労働者を主体とする雑業的労働の実態把握を試みる。

以上によって、開発工業化の下で、急速に肥大化する首都圏・都市労働市場の編成と、上級労働市場から雑業的労働市場まで広範囲に見られる不安的就業の存在に注目し、労働問題の視角から開発体制の評価を考える。

フィリピンのスラムと開発——中西 徹

この報告では、フィリピンの慢性的な経済停滞状態が主として1970年代の「開発政策」に起因することをあきらかにし、停滞から脱出するための糸口を検討したい。

工業化を重視した経済開発論、とくにその巨視的分析では、経済発展過程における農業の役割は、①生産、②生産要素、③市場、④外貨の側面における工業部門に対する貢献にあると規定される。フィリピンの経済停滞はこの開発論を意図的な曲解の下に「開発」政策へ適用したために生じたと解釈することができる。農村を製品市場と考えず工業化を推進した政策当局にとって、賃金財たる農産物の生産性向上は、1)賃金費用節約、2)労働組合対策、3)食糧輸入抑制による外貨節約の観点からのみ重要な課題であった。「緑の革命」と農地改革による1970年代の農業開発はこの要請の下に行われ、農村側の諸条件は無視されたのである。そのため、農民階層分化によって村落社会経済メカニズムが変容するに及び、土地なし層を中心とする過剰な農村都市間人口移動が生じた。かくて、マニラ首都圏に大規模なスラムが形成されたのである。しかも、スラムには独自の拡大メカニズムが内在し、都市インフォーマル部門が雇用を吸収してきたために、資本集約財産業主導の工業部門における雇用吸収力の低さにもかかわらず、その規模は拡大の一途を辿った。現在のマニラ首都圏における大規模なスラムの存在は、70年代の「開発政策」の必然的帰結であり、その失敗の象徴であるといえよう。

したがって、従来の工業化要件としての「農村開発」（農業技術革新や対象を小作農に限定した農地改革の推進）はフィリピンの経済発展のための十分条件ではない。大都市スラム居住者の経済支持政策と、農村最貧層（中小地主制度下の土地なし層、大農園制度における農園労働者や最貧農村地方の居住者）の経済支持政策をリンクさせた総合的な「開発」計画の立案と実施が喫緊の課題である。

マレー系ミドルクラスを通して見た新経済政策——奥村みさ

マレーシア政府が1970年から1991年まで実施してきた、新経済政策（New Economic Policy、以下 NEP と略す）は、マレーシアの「独立国家としての真の自立・

「国民統合」を目指して展開されてきた政策であった。NEPの成果を分析することは、すなわち、この20年間、マレーシアが歩んできた「脱植民地化と開発体制の展開」の軌跡を論じることに他ならない。

本発表ではNEPの落とし子ともいえるマレー系ミドルクラスに焦点をあて、彼らのライフスタイル・価値観を通して、NEPがマレーシア社会にもたらした社会変化を考察する。

本発表では、まず、NEPが立案・施行された歴史的背景を述べる。NEPによって、マレーシア経済がそれまでの輸出代替工業化から外資誘致・輸出指向工業化への産業構造の転換を計ったこと、そして、社会におけるあらゆる分野でのマレー人優先政策を実施したことなどが、マレー系ミドルクラスの台頭を促した大きな要因である。

発表の中心となるのは、「マレー系ミドルクスの特徴」の部分である。ここでは、既存の資料のレビューと共に、発表者が彼らのライフスタイルを観察した結果や、実施したインタビューの結果などを織り混ぜながら、いわゆる「ミドルクラス」として社会学的プロト・タイプに当てはまる部分と彼ら独自の特性とを浮き彫りにする。その中で特に、彼らのエスニシティ意識を取り上げ、それがマレー人優先政策によって、あるいは都市生活によって、そして日々のバイリンガル（マレー語と英語）生活によって、どのような影響を受けているのか、を明らかにする。

最後に、マレーシアの独立国家としての自立・国民統合を標榜してきたNEPが、結果として、この20年、その意図とは逆に、かえって先進国への経済的依存度を深め、そのことが文化的にも西洋文化の影響を強め、また国民統合をより困難にしてしまっている現状を論じたい。

ビルマ式社会主義下の農村経済 高橋昭雄

1962年3月に成立したネーヴィン政権は、強烈な民族主義に根ざした「ビルマ式社会主義」を国家建設の中心思想に据え、外国資本排斥・自民族中心主義的な資本蓄積を指向した。こうした理念の下で、植民地的モノカルチャー経済から脱皮して工業化を推進していくためには、一次產品を輸出してそれで得た外貨で原材料や生産財を輸入し工業化を実現していくという方途を探るしかなかった。特に英領期にその生産に特化することになった米は、国内の食糧として、そして外貨獲得手段として最も重要な物資であった。そのために政府は農民を国家建設の担い手として彼らが農地を耕作する権利を保証する一方、農地の国有制、供出制、強制栽培制といった様々な強制的手段で、農村および農民を管理してきた。だが農民の側も彼らなりにこれに対応し、そしてその対応の仕方そのものが農民の再生産システムを規定し、社会主義体制下の農村経済の中に構造化されていった。

経済発展のための米の生産性の向上と「社会主義的」農地改革の徹底による農地の平等な分配は必ずしも両立するものではなく、政府は前者を優先させたため、農地改革は不徹底に終わり、農村には農民層と農業労働者層の2大階層が固定化してしまうこ

「国民統合」を目指して展開されてきた政策であった。NEPの成果を分析することは、すなわち、この20年間、マレーシアが歩んできた「脱植民地化と開発体制の展開」の軌跡を論じることに他ならない。

本発表ではNEPの落とし子ともいえるマレー系ミドルクラスに焦点をあて、彼らのライフスタイル・価値観を通して、NEPがマレーシア社会にもたらした社会変化を考察する。

本発表では、まず、NEPが立案・施行された歴史的背景を述べる。NEPによって、マレーシア経済がそれまでの輸出代替工業化から外資誘致・輸出指向工業化への産業構造の転換を計ったこと、そして、社会におけるあらゆる分野でのマレー人優先政策を実施したことなどが、マレー系ミドルクラスの台頭を促した大きな要因である。

発表の中心となるのは、「マレー系ミドルクスの特徴」の部分である。ここでは、既存の資料のレビューと共に、発表者が彼らのライフスタイルを観察した結果や、実施したインタビューの結果などを織り混ぜながら、いわゆる「ミドルクラス」として社会学的プロト・タイプに当てはまる部分と彼ら独自の特性とを浮き彫りにする。その中で特に、彼らのエスニシティ意識を取り上げ、それがマレー人優先政策によって、あるいは都市生活によって、そして日々のバイリンガル（マレー語と英語）生活によって、どのような影響を受けているのか、を明らかにする。

最後に、マレーシアの独立国家としての自立・国民統合を標榜してきたNEPが、結果として、この20年、その意図とは逆に、かえって先進国への経済的依存度を深め、そのことが文化的にも西洋文化の影響を強め、また国民統合をより困難にしてしまっている現状を論じたい。

ビルマ式社会主義下の農村経済 高橋昭雄

1962年3月に成立したネーヴィン政権は、強烈な民族主義に根ざした「ビルマ式社会主義」を国家建設の中心思想に据え、外国資本排斥・自民族中心主義的な資本蓄積を指向した。こうした理念の下で、植民地的モノカルチャー経済から脱皮して工業化を推進していくためには、一次產品を輸出してそれで得た外貨で原材料や生産財を輸入し工業化を実現していくという方途を探るしかなかった。特に英領期にその生産に特化することになった米は、国内の食糧として、そして外貨獲得手段として最も重要な物資であった。そのために政府は農民を国家建設の担い手として彼らが農地を耕作する権利を保証する一方、農地の国有制、供出制、強制栽培制といった様々な強制的手段で、農村および農民を管理してきた。だが農民の側も彼らなりにこれに対応し、そしてその対応の仕方そのものが農民の再生産システムを規定し、社会主義体制下の農村経済の中に構造化されていった。

経済発展のための米の生産性の向上と「社会主義的」農地改革の徹底による農地の平等な分配は必ずしも両立するものではなく、政府は前者を優先させたため、農地改革は不徹底に終わり、農村には農民層と農業労働者層の2大階層が固定化してしまうこ

とになった。厳しい供出政策は土地所有構造や生産力構造、あるいは雇用構造に強い影響を及ぼし、相続慣行も変化させた。しかし、1970年代の高収量品種の強制的導入とそれに続く供出制度の強化は、農民の対応の限度を超えるものであった。特に農家経営が深刻化したのが理想のビルマ的小農とされるダドントゥン層の農家である。この結果、80年代半ばに農村部に不穏な動きが見え始め、政府はやがて米取引の自由化を行わざるを得なくなる。そしてそれが都市部での急激なインフレーションを招き、1988年8月の民主化要求闘争の火つけ役となるのである。

ドイモイ下の指導政党と社会

栗原浩英

1986年のベトナム共産党第6回党大会でドイモイが提起されてからすでに7年が経過し、この間にベトナムの社会は大きく変貌した。生活（とくに経済活動）の主体は政治・経済生活の場としての集団から、家族・個人へと移った。この現象はとりわけ、労働点数制に基づく合作社での集団労働が廃止され、家族労働が主となった農村において顕著である。各自の自助努力が要求されるに至ったことは、同時に集団主義時代には運動体としての社会を維持するために不可欠であった各種思想運動を消滅させることにもなり、社会の脱イデオロギー化を促進している。言論の自由の幅の拡大や伝統的な祭礼の復活、迷信の流行（寺社への参詣熱、村の祭礼、占いの流行等）もそうした背景と切り離してとらえることはできないであろう。このような社会状況の中で党の役割も、家父長的な位置にあった集団主義時代からすると、行政を中心とした実務的な方向に変わってきている。

ドイモイを歴史的に位置付けるならば、それはかつて共産党自身が否定した道の肯定（集団主義との決別）に立脚してはいるが、党にとっても、社会構成員の側にとつても未知の経験ではないといえる。1954年のジュネーブ協定後、とくに1956～57年の北部ベトナムの社会状況は当時の党のリベラルな政策とも相俟って、現在の状況に酷似した諸特徴を呈していた。さらに、その後成立した集団主義体制にあっても、家族経済、自由市場、各戸請負制など党からは否定的にみなされながらも、存続してきた部分があった（「二次経済」）。その中でも、各戸請負制の導入にかんする歴史的経緯からは、理論と実現をめぐる中央権力と地方社会との攻防を読みとることができる。今日ドイモイといわれているのは、まさに後者が勝利した結果である。

資料・研究短報

フォー・ヒエン国際シンポジウムについて

奈良修一

1992年12月9日から3日間、ベトナム北部のハイズオン省フニエン市で“Scientific Symposium on Pho Hien”が開催された。この学会は、1990年に開催された「ホイアン・シンポジウム」に続くもので、17世紀、北ヴェトナム（トンキン）の海外貿易

とになった。厳しい供出政策は土地所有構造や生産力構造、あるいは雇用構造に強い影響を及ぼし、相続慣行も変化させた。しかし、1970年代の高収量品種の強制的導入とそれに続く供出制度の強化は、農民の対応の限度を超えるものであった。特に農家経営が深刻化したのが理想のビルマ的小農とされるダドントゥン層の農家である。この結果、80年代半ばに農村部に不穏な動きが見え始め、政府はやがて米取引の自由化を行わざるを得なくなる。そしてそれが都市部での急激なインフレーションを招き、1988年8月の民主化要求闘争の火つけ役となるのである。

ドイモイ下の指導政党と社会

栗原浩英

1986年のベトナム共産党第6回党大会でドイモイが提起されてからすでに7年が経過し、この間にベトナムの社会は大きく変貌した。生活（とくに経済活動）の主体は政治・経済生活の場としての集団から、家族・個人へと移った。この現象はとりわけ、労働点数制に基づく合作社での集団労働が廃止され、家族労働が主となった農村において顕著である。各自の自助努力が要求されるに至ったことは、同時に集団主義時代には運動体としての社会を維持するために不可欠であった各種思想運動を消滅させることにもなり、社会の脱イデオロギー化を促進している。言論の自由の幅の拡大や伝統的な祭礼の復活、迷信の流行（寺社への参詣熱、村の祭礼、占いの流行等）もそうした背景と切り離してとらえることはできないであろう。このような社会状況の中で党の役割も、家父長的な位置にあった集団主義時代からすると、行政を中心とした実務的な方向に変わってきている。

ドイモイを歴史的に位置付けるならば、それはかつて共産党自身が否定した道の肯定（集団主義との決別）に立脚してはいるが、党にとっても、社会構成員の側にとつても未知の経験ではないといえる。1954年のジュネーブ協定後、とくに1956～57年の北部ベトナムの社会状況は当時の党のリベラルな政策とも相俟って、現在の状況に酷似した諸特徴を呈していた。さらに、その後成立した集団主義体制にあっても、家族経済、自由市場、各戸請負制など党からは否定的にみなされながらも、存続してきた部分があった（「二次経済」）。その中でも、各戸請負制の導入にかんする歴史的経緯からは、理論と実現をめぐる中央権力と地方社会との攻防を読みとることができる。今日ドイモイといわれているのは、まさに後者が勝利した結果である。

資料・研究短報

フォー・ヒエン国際シンポジウムについて

奈良修一

1992年12月9日から3日間、ベトナム北部のハイズオン省フニエン市で“Scientific Symposium on Pho Hien”が開催された。この学会は、1990年に開催された「ホイアン・シンポジウム」に続くもので、17世紀、北ヴェトナム（トンキン）の海外貿易

とになった。厳しい供出政策は土地所有構造や生産力構造、あるいは雇用構造に強い影響を及ぼし、相続慣行も変化させた。しかし、1970年代の高収量品種の強制的導入とそれに続く供出制度の強化は、農民の対応の限度を超えるものであった。特に農家経営が深刻化したのが理想のビルマ的小農とされるダドントゥン層の農家である。この結果、80年代半ばに農村部に不穏な動きが見え始め、政府はやがて米取引の自由化を行わざるを得なくなる。そしてそれが都市部での急激なインフレーションを招き、1988年8月の民主化要求闘争の火つけ役となるのである。

ドイモイ下の指導政党と社会

栗原浩英

1986年のベトナム共産党第6回党大会でドイモイが提起されてからすでに7年が経過し、この間にベトナムの社会は大きく変貌した。生活（とくに経済活動）の主体は政治・経済生活の場としての集団から、家族・個人へと移った。この現象はとりわけ、労働点数制に基づく合作社での集団労働が廃止され、家族労働が主となった農村において顕著である。各自の自助努力が要求されるに至ったことは、同時に集団主義時代には運動体としての社会を維持するために不可欠であった各種思想運動を消滅させることにもなり、社会の脱イデオロギー化を促進している。言論の自由の幅の拡大や伝統的な祭礼の復活、迷信の流行（寺社への参詣熱、村の祭礼、占いの流行等）もそうした背景と切り離してとらえることはできないであろう。このような社会状況の中で党の役割も、家父長的な位置にあった集団主義時代からすると、行政を中心とした実務的な方向に変わってきている。

ドイモイを歴史的に位置付けるならば、それはかつて共産党自身が否定した道の肯定（集団主義との決別）に立脚してはいるが、党にとっても、社会構成員の側にとつても未知の経験ではないといえる。1954年のジュネーブ協定後、とくに1956～57年の北部ベトナムの社会状況は当時の党のリベラルな政策とも相俟って、現在の状況に酷似した諸特徴を呈していた。さらに、その後成立した集団主義体制にあっても、家族経済、自由市場、各戸請負制など党からは否定的にみなされながらも、存続してきた部分があった（「二次経済」）。その中でも、各戸請負制の導入にかんする歴史的経緯からは、理論と実現をめぐる中央権力と地方社会との攻防を読みとることができる。今日ドイモイといわれているのは、まさに後者が勝利した結果である。

資料・研究短報

フォー・ヒエン国際シンポジウムについて

奈良修一

1992年12月9日から3日間、ベトナム北部のハイズオン省フニエン市で“Scientific Symposium on Pho Hien”が開催された。この学会は、1990年に開催された「ホイアン・シンポジウム」に続くもので、17世紀、北ヴェトナム（トンキン）の海外貿易

港であったフォー・ヒエン（現フンイエン）の歴史・考古学・文化などに関するシンポジウムである。

9日の午前中は、省委員会主席による開会式に引き続き、新たに国の史跡に指定されたこの市の寺・廟から、ホー・チ・ミンの胸像をも含む御神体を乗せた御輿が出て、多くの信者による盛大な行列が組まれた。午後からは、ハイズオン省立博物館の館長、ター・バン・ホアイン氏によるフォー・ヒエンの史跡案内となった。新たに国の史跡に指定された寺院・廟や、17世紀にオランダ商館があったと言われている川岸を巡った。

翌日からフンイエン市の博物館を会場にして、学会が開催された。ハノイ大学歴史学科のファン・フィ・レ教授が議長をつとめ、全部で26の論文が4つの主題に別れて発表された。発表は2日間にわたり、7つから8つの論文が発表された後に討論を行う形式で行われた。

この学会には、何人かの外国からの出席があり、イギリスから Anthony Farrington 博士、アメリカからは Keith Taylor 教授、日本からは藤原利一郎教授、川本邦衛教授、桃木至朗氏、奈良修一が出席した。

初日の午前中は、ハイズオン市長による開会宣言にはじまり、ファン・フィ・レ教授による導入発表が行われ、この学会の目指すべき方向と問題点があげられた。これに引き続き、第一部「フォー・ヒエンの誕生」が始まられ、7人の発表が行われた。この部分では、フォー・ヒエン市の地理や誕生に関する論文が発表され、桃木至朗氏の“Japan and Vietnam in the Asian Trading System in the XVIIth-XVIIIth centuries”と、タナ・リー女史による代読であったが、Anthony Reid 教授の“The Unthriving Alternative: Chinese Shipping in Southeast Asia, 1567-1842”が発表された。

午後からは、第2部「社会経済的基盤と住民」と題され、藤原利一郎教授の“The Regulation of the Chinese under the Trinh Regime and Pho Hien” の発表からはじまり、16・17世紀の社会、経済に関する8つの発表が行われた。この部会の中で、1年オランダ・ライデン大学に留学していた Nguyen Quang Ngoc 博士の “Some Thoughts on the Dutch East-India Company and the Pho Hien Factory” が発表された。

学会2日目の午前中には、第3部「フォー・ヒエンの国内・国際関係」が行われ、8人の発表が行われた。Anthony Farrington 氏の “English East India Company Documents relating to Hien and Tonkin” や奈良の “Silk Trade between Vietnam and Japan in the Seventeenth Century” など、貿易に関する発表が行われた。

午後の第4部「フォー・ヒエンの衰退、並びに遺跡の維持と復興」では、4人の発表が行われ、最後にファン・フィ・レ教授によって、次のように総括が行われた。

この学会では、多くの問題点が指摘され、専門家が一堂に会することができたことは、大変評価すべきである。しかし、全般的な将来の課題として、まず史料の問題が指摘される。まず文書史料であり、考古学史料であり、資金不足による史料の保存・

補修・さらに後進に対する教育が遅れていることは重要な課題である。

次に今回討論された議論の中で、まず、フォー・ヒエンの成立状況についての議論があり、この街のトンキンデルタの中で占めた位置についての意見がいくつか出ていた。この問題点については、さらに多くの資料を集めて、研究を深める必要があると思われる。

第2に、この街の興隆と衰亡に関する議論はかなり多く出されたが、それらをまとめると次のようなものになるだろう。村として出発したフォー・ヒエンは港として発展し、17世紀に最も栄えた。海外貿易が衰えた後も、省都としての経済的地位が存続した。しかし、19世紀には、また戦争に巻き込まれたために、経済は衰え、独立戦争以後現在に至るまで、経済復興につとめている最中である。

第3に、今後のフォー・ヒエンの歴史研究は、経済的側面だけではなく、文化的側面をも加味して行かなければならないだろう。と、教授は以上のようにまとめられた。

筆者はもともと中国史が専門のため、ベトナム史には暗いのであるが、17世紀のベトナム史研究は、史料の制約もあり、あまり進められているとは言い難いと聞いている。しかし、今回の学会によって、あまり知られていなかったトンキンの貿易港フォー・ヒエンの名が知られるようになったことと、イギリスとオランダの東インド会社の史料を使うことによって歴史研究をさらに深める可能性があることが多くの人に認識されたことが、今度の学会の有意義な点であろう。

なお、今回発表された論文は、ベトナム語版と英語版各々で、出版されることになっている。

第34回国際アジア・北アフリカ研究会議——市川健二郎

1993年8月23—28日、香港大学主催の上記 ICANAS 会議が香港島の演芸学院で開催され、約67カ国から1200余名が参加した。内別約50名が日本人で、本学会会員の山本達郎：大会名誉会長、石井米雄、寺田勇文の3氏と筆者が出席した。前回のカナダ大会に比べると、北米と中南米からの参加者が減り、東アジア、東南アジアからの参加者が増加した。とくに、中国からの出席者が多く、モウコ人、ロシア人、ウクライナ人の姿も見受けられた。次回は1997年7月にハンガリーのブタペストで開催する予定である。

会場は401部会に分れ、東南アジア部門31部会の他に、中国部門の明清時代の南海貿易、韓国と南海の植民地以前の諸王朝の変遷、ユダヤ人の流浪と南洋華人社会などの部会、香港・マカオ部会などが散在しており、筆者は以下の部会に出席するに止まった。先史部会では、西オーストラリア大のボウドラー女史が洪積世の人種移動を、ニュージーランド・オタゴ大のハイガムがタイ湾北部の先史遺跡分布を説明、香港文化財記念物局のチュウが華南と香港の100遺跡と海上の民の生活を比較した。考古部会では、インドネシア考古学調査センターのスジョノとブンタリ女史が青銅鼓とアウトリガーカヌー交易圏、及び青銅器からみた埋葬儀礼を解説した。

補修・さらに後進に対する教育が遅れていることは重要な課題である。

次に今回討論された議論の中で、まず、フォー・ヒエンの成立状況についての議論があり、この街のトンキンデルタの中で占めた位置についての意見がいくつか出ていた。この問題点については、さらに多くの資料を集めて、研究を深める必要があると思われる。

第2に、この街の興隆と衰亡に関する議論はかなり多く出されたが、それらをまとめると次のようなものになるだろう。村として出発したフォー・ヒエンは港として発展し、17世紀に最も栄えた。海外貿易が衰えた後も、省都としての経済的地位が存続した。しかし、19世紀には、また戦争に巻き込まれたために、経済は衰え、独立戦争以後現在に至るまで、経済復興につとめている最中である。

第3に、今後のフォー・ヒエンの歴史研究は、経済的側面だけではなく、文化的側面をも加味して行かなければならないだろう。と、教授は以上のようにまとめられた。

筆者はもともと中国史が専門のため、ベトナム史には暗いのであるが、17世紀のベトナム史研究は、史料の制約もあり、あまり進められているとは言い難いと聞いている。しかし、今回の学会によって、あまり知られていなかったトンキンの貿易港フォー・ヒエンの名が知られるようになったことと、イギリスとオランダの東インド会社の史料を使うことによって歴史研究をさらに深める可能性があることが多くの人に認識されたことが、今度の学会の有意義な点であろう。

なお、今回発表された論文は、ベトナム語版と英語版各々で、出版されることになっている。

第34回国際アジア・北アフリカ研究会議——市川健二郎

1993年8月23—28日、香港大学主催の上記 ICANAS 会議が香港島の演芸学院で開催され、約67カ国から1200余名が参加した。内別約50名が日本人で、本学会会員の山本達郎：大会名誉会長、石井米雄、寺田勇文の3氏と筆者が出席した。前回のカナダ大会に比べると、北米と中南米からの参加者が減り、東アジア、東南アジアからの参加者が増加した。とくに、中国からの出席者が多く、モウコ人、ロシア人、ウクライナ人の姿も見受けられた。次回は1997年7月にハンガリーのブタペストで開催する予定である。

会場は401部会に分れ、東南アジア部門31部会の他に、中国部門の明清時代の南海貿易、韓国と南海の植民地以前の諸王朝の変遷、ユダヤ人の流浪と南洋華人社会などの部会、香港・マカオ部会などが散在しており、筆者は以下の部会に出席するに止まった。先史部会では、西オーストラリア大のボウドラー女史が洪積世の人種移動を、ニュージーランド・オタゴ大のハイガムがタイ湾北部の先史遺跡分布を説明、香港文化財記念物局のチュウが華南と香港の100遺跡と海上の民の生活を比較した。考古部会では、インドネシア考古学調査センターのスジョノとブンタリ女史が青銅鼓とアウトリガーカヌー交易圏、及び青銅器からみた埋葬儀礼を解説した。



古代史部会では蘭州・西北師範大の馬英昌が中国・インド文化の南海伝播を漢文史料によって解説したが、海外研究の現状把握が弱かった。インディアナ州教育大のホールは16世紀以前のインド洋港市の交易網について仮説を提唱し、ハワイ大のソールハイムからきびしい反論を浴びた。「1750—1870年代の韓国と南海における植民地化以前の諸王朝の変様」部会では、オーストラリア国立大のリードが徳川日本の社会変化と同時代の東アジアと東南アジア諸王朝の朝貢貿易、華僑社会、私貿易の発達、文学の革新などの変化をとりあげ、マラヤ大のカシリタンバイ・ウエルズ女史は16世紀スマトラのシアック王国のマラッカ海峡貿易とアラブ系国王権力の変化を説き、オーストラリア国立大のクリーズはバリ島の8王国がオランダ勢力に抵抗し、連合していく変化を説明した。大邱・キュンプク大のリーは李朝朝鮮の人口増加と農業生産力について、また、ハノイ大のウ・ミンジャンも阮朝の同様の問題を扱ったが、共に都市一農村関係の説明が弱かった。

植民地主義の部会では、フランスのアンティパ女史がカンボジア伝統法、ベトナム法、フランス法の併存関係を、また、ブルネイ大のフセインミヤがブルック統治下のブルネイ軍の部族別部隊編成を説き、オランダ言語・人類学研究所のファン・ダイクはブディ・ウトモ期のインドネシア人官吏を高く評価した。香港大学のオーウェンは戦後フィリピンにおける米国新植民地主義批判を論じ、南オーストラリア大のチャン・ミヴァン女史は19世紀の詩にみえる婦人の権利を説いた。「ユダヤ人の流浪と南洋華人社会」部会では、オーストラリア国立大のリードが中欧のユダヤ人と南洋華人の企業家精神や国民形成、民族同化を比較し、同じ大学のレスリーが華人の中国性の持続を論じた。また、復旦大学のベッタ、アモイ大のリン、上海社会科学院のパン等が上海シオン同盟について説明した。



「民族性と政治」部会では、ハワイ大のアコスタがミンダナオ島ラマド族の社会変化を報告し、フィリピン大のルイスはルソン島とビサヤ島原住民が数世紀にわたりモロ族の侵入を防いだ歴史を描いた。華僑部会では、カナダ・ビクトリア大のライがカナダ中華街の変様を、ブルネイ大のニエウがブルネイ人口の増加を、また、オーストラリア国立大のタンがブルネイの失業問題を説明した。マラヤ大のチュア女史はマラヤ華人社会の世代格差を話した。大正大の市川は1940年代の中国民主同盟を支持した華僑について話し、香港大学校長ワン・ガンウから質疑とコメントがあった。エルランゲン大のリッパートも同様な問題を中国市民社会の部会で発表し、筆者と意見を交換した。

以上の東南アジア関係諸部会では、ワン・ガンウ、山本達郎両大会名誉会長が出席して活発に発言された。東南アジア部門以外では、山本先生が発表された敦煌研究部門、シルク・ロード、仏教研究、科学技術史、珠江デルタの投資環境、中国音楽などの大型パネルがあった。会期中の毎夕、香港交響楽団等による敦煌樂舞、唐宋遺音、胡楽、九歌など民族音楽の演奏会があり、学会に芸術の彩りをそえた。

第5回国際タイ研究会議参加報告——加藤久美子

1993年7月5日から10日までの6日間、ロンドン大学の SOAS (School of Oriental and African Studies, 東洋・アフリカ研究学部) において、5th International Conference on Thai Studies (第5回国際タイ研究会議) が開催された。会議は16のパネルと3つの講演を中心に構成されていた。1日目は開会式と講演があり、2日目から5日目にかけてはテーマ別にパネルに分かれて研究発表と討論がなされた。また、第4日と第5日には、パネル終了後にそれぞれ講演が行われた。最終日は、パネルのミーティングおよび全体のミーティングのための日とされていた。

まず、16のパネルのテーマを紹介する。

1. Minorities within Tai/Thai political systems : historical and theoretical perspectives
2. Thai literary traditions : classical and regional literatures in Thailand
3. Economic growth and environmental change in Thailand
4. Thai Buddhism : contemporary issues and historical context
5. Political and economic power at the intermediate levels
6. Perspectives on Tai music
7. New light on old Thai law texts
8. Source materials on Thai history c. 1600-1855 : reappraisals and discoveries
9. Minorities policy and practice in the Tai speaking region
10. The Tai languages in the twentieth century
11. Who benefits from 'development' in Thailand ?
12. The Thai economy in the 1930s
13. Political and social transitions in contemporary Thailand
14. Regional issues in the art and archaeology of Thailand
15. Villages in Thailand : a critical reassessment
16. The social and cultural context of the AIDS epidemic in Thailand

この他、Tai communities in India というパネルも用意された。多くのパネルは2日目と3日目または4日目と5日目の2日間にわたって設定されていたが、報告数の少ないものは1日だけの予定になっていた。

さて、筆者が報告者として参加することになったのは、村落研究に関する第15パネルであった。このパネルは7月8日、9日の2日間にわたって開催された。8日には8人、9日には2人、合計10人の報告者が報告し、全員の報告後には総合討論が行われた。このパネルにおける報告の内容は多岐にわたっており、中には、もともとの問題設定の段階では「村落」という概念、枠組みを直接意識していなかったと見受けられるものも含まれていた。そのためか、全体の議論もある一方向に収束していくというより、何か散漫な感じを残したまま展開していく印象を与えた。しかし、あえて言えば、ほとんどの報告は、近年における開発とともに村落の再編の過程を国家との

関わりで検討し、それによって村落の性格を再考してみようという共通の問題意識を持つていたと言える。

その他のパネルについては、1600年から1855年までの歴史を扱った第8パネル、法典に関する第7パネル、政治システムの中のマイノリティというテーマの第1パネルなど、7月6日と7日に行われたいくつかのパネルの報告を筆者は聞きにいたった。特に第1パネルは、同じくマイノリティの問題を扱った第9パネルと並んで、報告者もその他の参加者の数も多く活発な議論がなされていたようである。その他、筆者の目にしたり聞いたりした範囲内で言えば、エイズ問題に関する第16パネル多くの参加者の関心を集めていたらしい。

会議全体に関して言えば、互いに関係する報告がいくつものパネルに分散して同日になされたため、聞くことができないものがあったのが心残りであった。また、興味をひかれるパネルがあっても、同日に行われた他のパネルに参加したために、まったく聞くことができなかったり部分的にしか参加できなかったため議論の全体像がつかめなかったりしたのも残念であった。だが、これは、パネルのテーマ設定のしかたに問題があるということではない。たとえどんな基準でパネルを編成しなおしても同様の問題は出てくるであろう。したがって、参加者が会議の成果を確認するという意味でも、討論内容にも言及した論文集を刊行することが必要であろう。論文集は、各パネル参加者が独自に資金を搜して、パネルごとに刊行していくことになっている。すべてのパネルの論文集の早期刊行を期待したい。

地区例会・研究会活動状況

中国・四国地区 植村泰夫

[SEAF 研究会]

5月22日 植村 泰夫（広大文学部）

「世界恐慌下東ジャワ・シドアルジョ県における糖業の栽培縮小と農民」

（於広大文学部）

7月24日 矢野 泉（広大大学院生物圏科学研究科）

「タイにおける米流通の近代化」

（於広大旧総合科学部）

9月4日 金子元久（広大大学教育研究センター）

「インドネシアの高等教育の問題点」

（於広大文学部）

関西地区 深見純生・八尾隆生

1993年4月から10月までの関西例会は、10月を除いて従来通り摂南大学（大阪府寝屋

川市)において以下のように開催された。開催時間も従来通り午後2:30より5:30までである(内、発表1時間半、質疑応答1時間半)。参加者は25名前後で推移している。

4月17日(土) 藤田加代子(大阪大学・院)「VOC台灣商館の貴金属貿易——鎖国とゴールドロード——」

5月15日(土) James F. Warren(オーストラリア、マードック大学)“Southeast Asian History and Visual Images; Pirates, Pullers and Prostitutes”.

6月12日(土) 南田みどり(大阪外国語大学)「現代ビルマの小説」

7月10日(土) 松野明久(大阪外国語大学)「東ティモールとインドネシア」

8月 例年通りお休み

9月18日(土) 紙村徹(天理参考館)「ニューギニアの民俗身体観と女人国伝説の受容」

10月16日(土) 加納寛(名古屋大学・院)「タイ中央部土地神信仰の仏教的文化要素受容——近代における「伝統」の再編」<於大阪外国語大学>

中部地区————伊東利勝

中部地区では、南山大学の援助を受け、当大学を会場にして研究会を開催している。活動は毎月、第3もしくは第4土曜日に行っている。出席者は最近減少傾向にあり、今後は多彩な発表者やテーマをお願いすることにより、会の活発化をはかってゆきたい。1993年5月以降の活動状況は以下の通り。

- 1993年5月29日 中垣秋紀(藤岡町役場)
英領シンガポール・マラヤのからゆきさん—日本領事のからゆきさん観の変遷を中心に—
- 6月26日 倉橋正直(愛知県立大学)
広田言証師の東南アジア旅行
- 7月24日 明石陽至(南山大学外国語学部)
戦前のシンガポール日本人社会
- 9月18日 細井保(愛知大学国際問題研究所)
20世紀史におけるベトナム戦争—『危機の国際政治史1917~1992』から—
- 10月23日 トゥン・イー(愛知大学大学院客員研究員)
What is *Thathameda* tax in the reigns of King Mindon and Thibaw

関東地区————嶋尾 慎

関東例会はこれまで通り毎月最終土曜日に東京大学(本郷)山上会館会議室を借りて開催している(2時半~5時半)。4月以降の報告者と報告の題は以下の通りである。

- 1993年4月24日 桜井由躬雄「ベトナム新出史料の紹介—特に『社誌』を中心に」

- 5月29日 岡田建志 「フランス領期のベトナムにおける伝統に関する認識—
フイン・トゥク・カンとファム・クインの比較を中心に」
- 6月26日 生井香織 「ビルマ謀略機関「南機関」の源流を求めて」
- 7月24日 熊田直子 「ビルマにおけるダムマタッの地位の変遷—王朝時代か
ら独立後まで—」
- 9月25日 増田えりか「ラーマ一世の対中外交」
- 10月30日 船津鶴代 「タイの教育と社会階層—アーバン・バイアスの観点か
ら」

事務局からのお願い

『会報』の内容充実のため、資料・研究短報欄へご寄稿下さい

新資料に関する情報、探究資料の公開検索、内外での研究集会に関する情報や紹介（但し、本学会の組織とは直接関係なく、かつ恒常に運営されている研究会の年次報告に類するものはご遠慮下さい）、特定分野にかかる内外の新しい研究動向など、二千字程度を目処にお纏め頂き、事務局宛にご送付下さい。毎年2月末と8月末に締め切り、それぞれ5月及び11月発行の『会報』に掲載させて頂きます。

住所変更等につきましては、書面にてすみやかに事務局宛ご一報下さい。

「転居先不明」は会誌『東南アジア—歴史と文化—』『会報』その他各種の送付に支障をきたすことになります。ご面倒ながら、転居、転勤などの通知先に、本学会事務局も加えて頂きますようお願い申し上げます。

東南アジア史学会会報 第59号

1993年11月 発行

発行者 東南アジア史学会（会長 石澤良昭）
住所 〒102 東京都千代田区紀尾井町7-1
上智大学アジア文化研究所
電話 03-3238-3697 Fax 03-3238-3690
郵便振替 東京4-754665 東南アジア史学会
